

間中光
災害復興における観光の役割
—インドネシア・ムラピ山噴火災害を事例として—

本発表は、2010年に発生したインドネシア・ムラピ山噴火災害を事例として、観光を通じた災害復興の可能性と課題を明らかにしたものである。

2011年の東日本大震災以降、「観光を通じた災害復興」に関する文献は数多くみられる。本発表は関連既存文献を批判的に整理し既存研究の問題点を指摘し、それをもとに観光を通じた災害復興の可能性について論じているところに大きな特徴がある。具体的には、既存研究の問題点を以下のように指摘している：

1. 観光がもたらす災害復興への貢献について、関係者からの寄稿や取材に基づいて考察している研究が多い。そのため、復旧復興期で観光が成立する社会的条件や、被災者やコミュニティに与える影響の程度が不明瞭である。
2. ダークツーリズム研究の枠組みを用いて被災地における観光を捉える傾向があるが、時間的広がりの中で被災地を捉える視点が欠如し、さらに災害を契機に生まれた資源・つながりなどを生かす観光を捉えきれていない。

このような問題点を踏まえ、本発表では被災地における観光事象と災害復興の相互作用、つまり被災直後から復興期に至るコミュニティの変容に着目し、変容過程の中で出現する観光現象とその影響を時系列的に明らかにしたうえで災害復興の可能性と課題を明らかにしている。これは、災害復興における観光の役割に関する研究に対して、新たな視点を提供している。

本発表に当たって、発表者は2か月にわたる現地調査を実施し、被災集落で面接調査法による全戸調査、さらにコミュニティ内外のキーパーソンに対してインタビュー調査等を実施している。このような精緻な調査の結果、災害復興における観光の役割が復旧・復興の段階に応じて変化していること明瞭に捉えている。さらに、口頭発表では調査結果を図表・写真等を用いてわかりやすく提示していた。

以上の理由から、本発表に観光学会大学院生発表奨励賞を授与する。